

風間健氏の訃報が届いた。来る6月14日の顕彰会で、一緒に八重さんのことを語る予定になっており、それを楽しみにしていたが、それももう叶わぬこととなった。残念である。せめて風間氏が所蔵されている書簡類をここに紹介しておくことにする。このうちの一通は八重講座(24)で紹介済みであるが、それ以外にこんなにくさんあった。

なお風間健氏のご尊父にあたる風間久彦氏は、旧制会津中学から京都帝国大学へ入学し、京都会津会の学生幹事を引き受けていた縁で、晩年の八重と親しく交流していた。卒業して宇和島高等女学校へ数学の教師として赴任してからも、文通が続いていた。

当然、久彦の八重宛書簡が八重の手元にあつたはずだが、八重の遺産は広津家に相続されたこともあり、その後どうなったかは不明である。健氏は広津家に連絡をとられていたが、広津旭氏も奥様のみどり氏も亡くなられたので、とうとう分からないままになってしまった。

#### 【はじめに】

歴史春秋77号(2013年4月)に、風間健氏「新島八重子様」の御こころ―父への御手紙より―」が掲載された。これは新島八重が会津出身の風間久彦に宛てた書簡を紹介したものだ、ここで一挙に8点もの書簡が紹介されている。これによって八重の昭和3年から7年まで(やや同志社から離れていた時期)の動向が明らかになるので、貴重な資料とすることができる。そこで書簡類の翻刻を紹介する次第である(多少誤字の修正も行った)。

#### ① 昭和3年10月5日ハガキ

拝啓 其後御障りも御座いま／せんか。御心切に度々新聞御送り／被下難有御礼厚う申上ます。扱／私事種々用事が御座いまして／明晩之氣(汽)車にて帰京致つもり。／七日朝に着致拝顔榮申上度／先は御礼まで。昨日平石様に御出／被下ました。早々

十月五日

【解説】この年の9月28日に秩父宮殿下と松平勢津子姫の御成婚が挙行され、その祝賀会に出席すべく、八重は上京している。それに合わせて『会津戊辰戦争』の改訂版を出版すべく、著者の平石弁蔵は10月4日に広津家に滞在していた八重を訪ね、聞き取りを行っている。5日当日、八重は日本女子大学を訪問しており、その後でこのハガキをしたためたことになる。なお久彦は平石との仲介役をしたようで、それで八重は礼状を書いたのだあ

ろう。『会津戊辰戦争』にも「著者の知友風間久彦氏」と記されている。

② 昭和4年4月19日書簡

〈封筒表〉

宇和島高等女学校内

風間久彦様親展

〈封筒裏〉

京都市寺町通丸太町上ル

新島八重子

四月十九日

拝啓 御出登頃とちかへ（ひ）大分夏ら敷／相成ました。ます／＼御機嫌よくいら／せられ珍重／＼。毎日御書状実と／難有何時もくりかへし／＼拝見申上居／ながら御申訳も無御無音と打過御／申上候様も無相不替日々世話敷斗／暮し居ます。いよ／＼明二十日には東京／に参りしばらく皆々とにぎやかに暮し／可申楽み居ます。此間は天野様御尋／被下誠に嬉敷土よふ日頃に相成申候と只今／まで御出被下ましたが真に淋敷相不替／ポカんと一人淋敷種々の事と思ひ出御／なつかしく存じ上居ます。此ころは大分／御校にも御したしも出来御たのしき御／事と遠察致居ます。去る十一日に動物／園之近所に御茶に招かれ帰りに余り桜花／み事咲居ましたから十七八年ぶりにて／一人にて園内入桜花見物。花之数よりも人之／方は沢山。水元地方も実に見事で御座／居ました。東京之広津旭が此度宝塚之／植物園にはたらく事に相成昨日東京に一寸／帰りますので宅に参り一夜とまり昨夕／出立。私と同道致すとよろしくと存まし／たが二十四日までに宝塚に参らねばならぬ／ので東京にて仕度が世話敷夫で昨夜／行にて昨日は終日ごて。今日は私之荷／物出来余り御無沙汰故御機嫌伺ひかた／がた御もふしわけまで。さよなら

四月十九日 新島八重子より

風間久彦様

尚々 時下御いとへ（い）被遊候様くれぐれ

ねんじ候

【解説】八重は4月から5月にかけて上京しているようだ。またこの年久しぶりに花見をしたこと、久彦の友人である天野謙吉が訪ねてくれたこと、義理の孫である広津旭が宝塚植物園に就職したことがわかる。

③ 昭和4年12月16日書簡

〈封筒表〉

宇和島高等女学校内

風間久彦様親展

〈封筒裏〉

京都市寺町通丸太町上ル

新島八重子

十二月十六日

昭和之年も今少しに相成／ました。日々御機嫌よく御つとめ／被遊御目出度御よろこび入申上候／実に実に御もふしわけもなき／御ぶさたに打過さぞさぞ心なき／ものと思召候半存つづけ居ました。／御ゆるし被下度。当なく（つ）以来とか／く右之手がいたみいとど筆不精が／なをさら。東京にもとふか前に／五十日目によふよふ文を遣しました。／次からつぎといろいろ之用事が／出来昨としあたりとは大分から／だの工合が悪敷鳥渡外出致／ますとつかれよほどくつ（苦痛）に相成ま／した。九月東京に参り二十日斗／居ました／がとかく雨天がちにて／松平様にも御伺ひ致不申。孫の／はか参り其外友人の所に一度／かへ物に一度後は家にぐづぐづ／暮して帰京。度々貴兄より／御手紙真に難有みかん山に御出／は実に実にうら山敷よだれ／たらたらに御座候。当暮はなん／といたしましたか。いやら敷程／あたゝかにて所々参り候には大／仕合。今に寒気が参るだらふと／存居。明年の黒谷会津会を／楽しみ待居。貴兄も御なつか敷／思召候半と存居ます。先は御伺ひ／まで。早々かしく

十二月十六日

老ぬればふでとることも物うくて／おもふかたにも音づれもせず

八重子

風間様

尚々 どふぞ御身御大切に被遊ませ

【解説】八重は9月から10月にかけても上京したらしい。その間に亡くなった孫（襄次・正）の墓参りをしていたことがわかる。夏以来右手が痛くて筆もとれなかったことや、体調不良が続いていたことがわかる。

④ 昭和5年2月3日書簡

〈封筒表〉

伊予宇和島高等女学校

風間久彦様親展

〈封筒裏〉

京都市寺町通丸太町上ル

新島八重子

二月三日

少々閑かに相成りました。御病後如何／御安事申上居ます。どふぞ御大切被遊／候様ねんじ奉る。実に御申し訳も無／御無沙汰に打過居平に／御免被下度。／一月は種々之用事重なり夫に寒氣／故にいとゞ不生か他出致して帰宅すれば／何に致すもいやに相成 嘸々無心者と思召／候半と存つゞけ居ながら本日まで／実に昨冬より余り御便無故如何被遊／まさか御病氣とは十二日に黒谷にて秋山／奥様より御様子承りおどろき入りましたが／大分御よろしきと拝承安心致しました。／其折黒谷にて

さみしくも一人やまいに伏柴の／もゆるこゝろをおもひこそやる

幾そたびとはんとすれどとへもせぬ／身のおこたりをくゆとこそしれ

去月二十三日／亡夫四十年祭之折に

わかれしはたゞつかのまとおもひしに／はやくもたちし四十年せの今日

同時

あづさゆみ春たち来れば大磯の／岩うつなみの音ぞなつかし

うたにはなり居ませぬが御笑草に／御覧に入ます。／明日は立春とは申ながら御病後／御身御大切に被遊候様余り御無沙汰／故御わび申上ます。さよなら

二月三日

風間様

八重子より

【解説】八重は久彦の病気を京都府津会の秋山角弥の妻から聞き、驚いて2首の歌を贈っている。その後、その後に裏の40年祭に詠んだ歌2首も付け加えている。この手紙によって八重の歌が4首も確認された。

⑤ 昭和5年12月4日書簡

〈封筒表〉

伊予国上島高等女学校

風間久馬様親展

〈封筒裏〉

京都市寺町通丸太町上ル

新島八重子

十二月四日

拝啓増々寒く相成ますがます／＼御機嫌よく珍重に存奉る。二に私事／何之障りも(無)くらし居ますから／御休心被下度。扨昭和之としも／わづかになりました。御丈夫にて／御つとめは何より嬉敷存ます。／当此上も御氣付国家多くの姉／妹方の為に御はたらき祈居候。／此すり物は亡夫にく筆ヲ先年／石ばんすりにいたしましたしものを／一葉しん上致ます。御笑納／被下度ふる物に候らへども同志社時／報差上候。御覽被下度。引つゞき／後もさしあげます。先は御伺／ひまで。あら／＼かしこ

十二月四日

八重子

風間先生

【解説】封筒の宛先が「上島」となっており、また宛名も「風間久馬」と誤っている。八重は襄の直筆の「いしかねも」歌を石版で複製し、その一部を久彦に贈ったようだ。ついでに同志社時報を謹呈していることもわかる。

⑥ 昭和6年7月20日書簡

〈封筒表〉

宇和島高等女学校にて

風間久彦様親展

〈封筒裏〉

京都市寺町通丸太町上ル

新島八重子

七月二十日

今日は土用入。しかしひる／＼しく／日々御元氣にて御清光之よし／珍重／＼。当なつ休には御国元／に御かへり無よし。伊よがいよ／＼御好になりましたか。ケツコヲ／＼。／当地は毎日／＼雨斗真にうつ／とふ敷日斗つゞき居ます。／幸に私も先無事にくらし居ますから御休心被下度。とふより／御伺ひせねばならぬと存つゞけ居／ながら御無沙汰に相過御申訳／も無次第。御免被下度。七月東京に／参りまして帰る七日前よりふと／右

之手中指がいたみ其後段々／悪敷相成夫に種々用事重み／又指ヲ遣へますれば其夜よりいた／みますから相成丈ケ用心致／いとゞ筆不生がなを／＼不生／に相成御免被下度願上ます。外／出致さぬ其には庭前紅白の／木げの花を床にさしながめ／無草師ぢくをかけ楽しみ／居ます。其句に

不染世間法如蓮華在／水／

私も／此心になりたいと思ひ日々ながめ／て居ます。中々人様にいましめと／なる様なことなどはおもひもよら／ぬ事。古きうたに

ひかれなばあしき道にもいりぬべし／こゝろのこまに手づなゆるすな

つねにこゝろをいましめて居／ます。角田も去ル三月より大坂／に家内引こしました。只今同志社之／教師親類之人が居ます。角田も実／御咄しにならぬ悪人天かけくるへ。不一

【解説】八重は7月に上京したようだ。「世間の法に染まらざること蓮華の水に在るが如し」は、『法華経』従地湧出品第15に出ている一節である。なお末尾には「角田」という人の悪口が添えられている。

⑦昭和六年十月七日ハガキ

〈ハガキ表〉

宇和島高等女学校

風間久彦様

京都市寺町通り丸太町上ル

新島八重子

拝啓 其後は御無さに打過居ました。／まず御機嫌よく御消光。扱私事去る八月／中頃より少々気分悪敷九月二日より二三日前／まで床に付よふ／＼看護婦も返し先是／にて丈夫に相成可申。夫故に御申訳も無御ぶさ／た致居ました。平に御ゆるし被下度。京都／之秋はなつかしく有ませんか。御地が大分御／氣に入たとめい（みえ）ます。さよなら  
十月七日

【解説】八重は9月2日から体調をくずし、一ヶ月程寝こんでいたらしい。このハガキによつて、9月に会津に行けないことが明らかになる。

⑦昭和7年1月18日ハガキ（ペン書き）

〈ハガキ表〉

宇和島市

宇和島高等女学校

風間久様

京都市寺町通丸太町上

新島八重子

拝啓 毎日御寒く御座います。如何に／みらせられますか。先日小包もて短冊／御送りいたしました。が御受取下さいまし／たでせうか。御尋ね申候つつ私事も昨／年末の病氣いまだ全快いたさず臥床／いたしてゐますけれど宜しき方に向／つてゐますから御安心下さいませ。／先は御伺ひまで 早々

一月十八日

【解説】短冊の小包は12月27日に投函されている。正月に届くようにとの心遣いとされているが、そうになると「あしたづの」歌はそれ以前に詠まれていたことになる。

その他、年賀状が二通保管されている。

⑧ 昭和6年1月

〈賀状表〉

宇和島高等女学校

風間久彦様

新年御寿めで度／御祝ひ申上奉る／ 昭和六年一月

新島八重子

⑨ 昭和7年1月元旦賀状

〈賀状表〉

伊予宇和島高等女学校

風間久彦様

新年御寿めで度／御祝ひ申上奉る

昭和七年一月元旦

新島八重子

八十八歳

その他、所蔵一覧

⑪ 短冊

大正九年若松にて 東やまゆみはり月はてらせどもむかしの城はいまくさの原 八重子  
〈短冊裏〉昭和二年十二月

⑫ 書

清風在竹林 八十四歳 八重子

⑬ 書

明日の夜は何国の誰かながむらむなれし御城に残す月かげ  
八十四歳 八重子

⑭ 書

萬歳々々萬々歳 八十四歳 八重子

【解説】この書は福島県立葵高等学校所蔵のものが夙に知られていたが、風間久彦所蔵の書が出現したことで、もともと二枚書かれていたことが明らかになった。健氏によれば、久彦が八重の前で墨を擦ったとのことである。

⑮ 短冊

御慶事をきゝて いくとせかみねにかゝれる村雲のはれて嬉しき光りをぞ見る  
八重子 八十四歳

〈短冊裏〉 昭和三年秋 新島八重子拙筆

⑯ 写真

昭和三年十一月十七日うつし

新島八重子 八十四歳

風間兄

⑰短冊

戊辰長月二十日あまり三日の夜さしのぼる月いとさやかなるを見て  
明日の夜は何国の誰かながむらむなれし御城に残す月かげ

八重子 拙筆 八十五歳

〈短冊裏〉昭和四年春 新島

⑱短冊

御さかづきをいたゞきて  
数ならぬ身もながらぬ（へ）て大きみのめぐみの露にかゝる嬉しさ

八重子 拙筆 八十五歳

⑲短冊

寿 あしたづの鳴くをきゝつゝ嬉しくも米てふ文字のとしをむかへぬ 八重子  
〈短冊裏〉 新島 昭和七年一月 風間様